

「川の中島だ、おらこれ珍しいで、殿様にでも上げべえと思うだ」

「殿様さ？ おらがか？ 駄目だ、おらが殿様は渋柿宰相というでねえか。こんなの上げ

たつて『予に進上するとは奇特の至り』とか言つて只取りだべえ。気の毒の至りだわい。

それよつか仙台様に上げて見させ、大枚

のお金くださんべえ。」

「ああこれあんまりずねえ声出すな。人

に聞こえんぞ。やつぱりにしはえいこと

言う。うんじや仙台まで行つてくつか。

善は急げだあ、早く出かけんぞ。」

こうしてあの男は女房の入れ知恵で磐

梯裏の間道を抜け仙台表に出た。仙台侯

は世間周知の通り竹に雀の紋所である。

